巻頭言

新しい校長として

2006年4月から奈良高等学校の校長として赴任いたしました。まず、自己紹介をさせていただきます。私は大阪生まれの大和育ちで、学生の頃は毎日のように奈良に遊びに来ました。京都よりも奈良の方が落ち着いて好きでした。大阪大学大学院（基礎工学研究科）を修了の後に、（株）日立製作所で14年勤務、光ファイバー通信に携われる半導体リサーチセンターで研究開発に従事しました。その後、大阪大学基礎工学部から15年または16年、化合物半導体材料の研究と教育に従事してきました。企業と大学の両方の経験を活かし、奈良高専での人材の育成に役立つたいと思っています。

高専の高い評価

奈良高等学校に来ることになる前は、高専について詳しいとはほとんど何も知らせませんでした。私が在籍していた基礎工学部の物性物理学科（在籍約50名）は、毎年、高専から数名の学生が進学していて、皆さまをめでたく努めて、クラスで平均以上の成績を出すなどし、大学での高専進学の評価が良好でした。私の研究室にも13人の高校卒業生がありました。その内の2人は博士課程まで進み、いわゆる研究成果をあげて博士号を取得し、関西の大手企業で活躍しています。大学では高専卒業生が好評で、特に奈良高専の卒業生は優秀、と聞きました。また、今年の5月、ILO（ Loaded and Equable Designs）の調査団が日本の教育機関を調査したとき、大学や他の教育機関が人材の問題点を指摘されるなか、高専だけは、教職員の熱意と教育システムが「すばらしい」と高い評価を受けたということです。奈良高校をはじめ高専は大変評判が高いということを知りました。

高専は、当初、5年間教育による実践的な中級技術者の養成を目的として設立されました。この目的の立派に果たされ、卒業生は企業から「引き張り手」の状態です。企業の他に、近所は、高専卒業生の多くが全国の「専攻科」に進学するか、または大学の3年生に編入学しています。(奈良高専では約40名の卒業生が進学・編入学します。)そして、その後も大学院に進学する学生も沢山います。卒業生は「大学入試」を経ずに一貫した専門教育を受けたうえで、実験・実習・実技を多く取り入れた授業で実践的な技術を身につけています。高専卒業生は普通高校から大学に進学した他の大学生、大学院生とくらべて明確に違う特長をもっており、大学・大学院で他の学生たちと切磋琢磨することでそれぞれの持ち味・能力をさらにのばすことができると期待されています。高校卒業生の大学編入学・大学院進学はこのような観点からも歓迎されているのです。

国際化を目指して

奈良高等学校の今後の課題をひとつあげるとすれば、国際化です。奈良高等学校は海外に多くの姉妹校を持ち、それらの姉妹校と相互訪問し交流することで学生・教職員の国際化が進められます。特に、20歳前後の若い高専生、専攻科生にとって、海外を出て自らの五感で広い世界を実感することとともに、単なる観光旅行にとどまるのではなく奈良高専で学んだことや研究成果を英語で発表し、海外の同世代の学生と交流する体験はその後の人生の大きな糧となると思うのです。アジアを含む世界の若者は英語を話す手、英語の発音がうまく、文法が少し間違っていたりする事もありますが、意思の達成ができれば十分なのです。この体験を通じて英語を学ぶことの重要性を実感してもらいたいと思っています。

冷川 恭壽
奈良工業高等学校専門学校長

おわりに

わが国の第3期科学技術基本計画（平成18年から平成22年までの5年間）がこのほどまとめられました。厳しい国の財政事情のもと軒並み予算が削減される中で、「科学技術は明日への投資」と科学技術予算のみが増額されています。資源のないわが国の将来を「科学技術創造立国」にかけていると思われていています。私の計画の中でも人材育成の重要性が強調されています。奈良高等学校としても、この人材育成という目に社会貢献を果たすべく、一層努力したいと思っております。よろしくお願いいたします。